

## 第17回 BELCA賞決定

BELCAでは、このたび第17回BELCA賞の表彰物件（10物件）を以下の通り決定いたしましたので、お知らせいたします。

なお、表彰式は来る平成20年5月15日(木) 16時より、東京都中央区日本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルにて開催いたします。

### 第17回 BELCA賞表彰物件（順不同）

#### ロングライフ部門

物件名	所在地	竣工年	用途(改修前)	所有者	設計者	施工者	維持管理者
サッポロビール博物館	札幌市東区	1890 (1987改修) (2006改修)	博物館・飲食施設 (製糖工場→ビール用製麦工場)	サッポロビール(株)	サンガーハウゼン社 北海道庁建築課 改修：大成建設(株)一級建築士事務所	元施工：不明 改修：大成建設(株)	サッポロビール(株)
天神ビル	福岡市中央区	1960	事務所	(株)電気ビル	(株)竹中工務店	(株)竹中工務店	(株)電気ビル
日光金谷ホテル	栃木県日光市	1893	リゾートホテル	金谷ホテル(株)	本館等：不明 別館：久米権九郎 第二新館：(株)久米設計 改修設計：(株)アルコム 大成建設(株)一級建築士事務所	本館：野口新館等：不明 改修：大成建設(株)	金谷ホテル(株)
武庫川女子大学甲子園会館	兵庫県西宮市	1930	教育施設	学校法人武庫川学院	遠藤 新 改修：(株)大林組	(株)大林組	学校法人武庫川学院

#### ベストリフォーム部門

物件名	所在地	竣工年	改修年	用途		所有者	改修設計者	改修施工者
				改修前	改修後			
岡山県総合福祉・ボランティア・NPO会館「きらめきプラザ」	岡山県岡山市	1961	2005	病院	福祉関係施設等	岡山県	(株)竹中工務店	(株)竹中工務店
国際文化会館本館	東京都港区	1955	2006	会館	同左	(株)国際文化会館	(株)三菱地所設計 阪田 誠造 小林 正美 今川 憲英	清水建設(株)
宮城球場	仙台市宮城野区	1950	2006	観覧場(野球場)	観覧場(プロ野球場)	宮城県	KAJIMA DESIGN	鹿島建設(株)
養命酒健康の森 記念館	長野県駒ヶ根市	1930	2005 2002 移築	倉庫	記念館・販売所	養命酒製造(株)	(株)竹中工務店	(株)竹中工務店 北野建設(株)
Lattice shibaura (ラティス芝浦)	東京都港区	1986	2006	事務所	共同住宅・SOHO	日本土地建物(株)	(株)竹中工務店 (株)ブルースタジオ	(株)竹中工務店 日土地建設(株)
龍谷大学大宮学舎大宮図書館	京都市下京区	1936	2006	図書室 研究室	同左	学校法人 龍谷大学	(株)日建設計	松井建設(株)

## BELCA賞の概要

- 目的** 適切な維持保全を実施したり、優れた改修を実施した既存の建築物のうち、特に優秀なもの  
の関係者をロングライフ、ベストリフォームの2部門により表彰し、良好な建築ストックの  
形成に寄与することを目的とします。
- 受賞件数** 今回を含め、これまでロングライフ部門80件、ベストリフォーム部門86件、合計166件が  
BELCA賞を受賞しました。(これまでの表彰物件につきましては、次ページの地図をご参照  
ください)
- 要件** ロングライフ部門は長年にわたり適切な維持保全が実施され、建築後30年以上経過した建築  
物のうち特に優秀なものを表彰し、ベストリフォーム部門は最近改修され、その改修により  
画期的な活性化が図られ、改修後1年以上を経過した建築物のうち特に優秀なものを表彰し  
ます。
- 選考** 賞の選考は、学識経験者、建物所有、設計、建設、設備、メンテナンスといった多分野から  
なる「BELCA賞選考委員会」(下記名簿参照)により行われました。
- 表彰式** 表彰式は来る平成20年5月15日(木) 16時より、東京都中央  
区日本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルで開催される予定  
です。
- 受賞者** 表彰式では、ロングライフ部門で建物所有者、設計者、施  
工者、維持管理者の四者、ベストリフォーム部門で建物所  
有者、改修設計者、改修施工者の三者が表彰されます。  
なお、受賞物件には右写真にある賞牌(文化勲章受章者  
帖佐美行氏作)が贈呈されます。

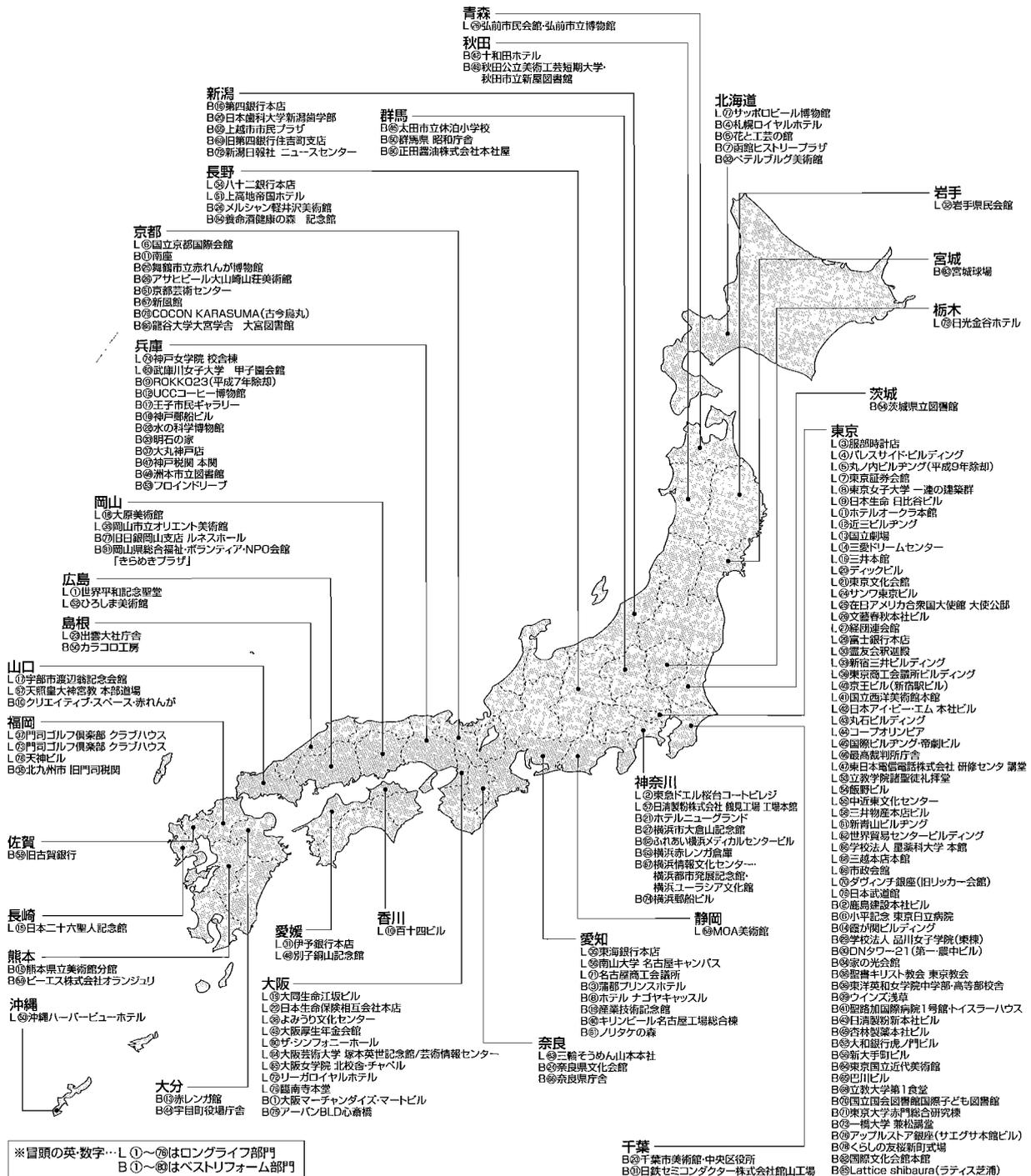


## 第17回(平成19年度)BELCA賞選考委員会(順不同・敬称略)

- 委員長 内田 祥哉 (東京大学名誉教授)
- 副委員長 三井所 清典 (㈱アルセッド建築研究所 代表取締役・芝浦工業大学名誉教授)
- 副委員長 鎌田 元康 (神奈川大学工学部建築学科教授・東京大学名誉教授)
- 委員 岩井 光男 (三菱地所㈱ 常務執行役員)
- 〃 尾崎 勝 (鹿島建設㈱ 執行役員建築設計本部副本部長)
- 〃 川上 雅靖 (㈱ビル代行 常任顧問)
- 〃 北 泰幸 (㈱竹中工務店 取締役設計本部長)
- 〃 桑原 義彦 (㈱久米設計 設計本部設計長)
- 〃 小堀 徹 (㈱日建設計 常務執行役員構造設計部門代表)
- 〃 富士原 秀和 (高砂熱学工業㈱ファシリティ・サービス本部リニューアル企画部長)
- 〃 渡辺 量夫 (㈱関電工 執行役員・㈱関工ファシリティーズ 常務取締役)

\*所属・役職等は選考時のものです

# BELCA賞分布地図



## 第17回 BELCA賞選考総評

BELCA賞選考委員会 委員長 内田 祥哉

BELCA賞は、良好な建築ストック、つまり社会の中で生き生きと活用される建築の形成に寄与することを目的に設けられた賞である。周到な長期計画で安定した維持保全を継続しているものをロングライフ、巧みな改修によって過去の社会で活躍した建物を現代社会に蘇生させたものをベストリフォームとし、二部門に分けて表彰し、平成3年から前回まで16回、合わせて156件の表彰件数に達している。

ロングライフ部門では、所有者、設計者、施工者、維持管理者の四者を、ベストリフォーム部門では、所有者、改修の設計者、施工者の三者を表彰しているが、地球環境問題にともなう建築物の長期利用の気運を背景に、BELCA賞への関心は年々高まりつつある。今回は、ロングライフ部門4件、ベストリフォーム部門6件、合わせて10件を表彰することになった。

今回表彰されるロングライフ部門には、30年という最低要件を遙かに超えたものばかりで、中には当時の設備機械を、そのまま働かせている珍しい例もあったが、殆どは、最近の技術による設備の更新と、耐震補強を完了している。今回特に印象的であったのは、二つの物件から、新築当時のトレンチが発見されたことで、これが設備更新に大きな役割を果たしており、長期展望を持った建物の寿命の長さに改めて啓発された。

ベストリフォーム部門では、例年の例のように用途の転用を見事に成し遂げたものがあり、オフィスビルを住宅に変身させた例では、居住条件を、マニアックな個人、SOHOに特定している点が注目された。しかし本年は、殆どの物件が、用途の変更が目立たないものが多く、耐震補強と設備の更新を巧みに咬み合わせて、現代化への脱皮を成功させた例が多かった。例えば、中庭への増築で耐震と設備を更新した。耐震補強のために追加した外部まわりの架構のなかに、水まわりの施設を移して、内部の天井・床配管を一掃した、などの例である。そのほか、特に審査員の注目を引いたのは、公園機能を取り入れたりして更新を考えた野球場であった。

以上、本年の入選物件は、いずれの受賞物件も耐震補強と設備の更新に注目すべき点があり、そこに様々な工夫と知恵のある物件が発掘された。おそらく今後の受賞作は、此の方向の技術がますます磨かれたものとなるだろう。

本年は、これまで受賞のなかった、宮城、栃木の両県からの入選があったが、未だ受賞物件のない県が16県あり、建物の維持保全技術の全国的向上を目指す上でも、これらの地域からの応募を切に期待したい。

今回表彰される物件が、我が国の優良な建築ストックの形成に寄与することを確信するとともに、建築物の維持保全に日夜努めておられる関係者に対して深い敬意を表したい。

## 第17回 BELCA賞ロングライフ部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 鎌田 元康

第17回BELCA賞にも、例年同様多くの応募物件があったが、ベストリフォーム部門、ロングライフ部門ともに、例年にもまして優れた物件が多いというのが選考委員全員の感想であり、書類審査による1次選考から激戦となった。今回ロングライフ部門で選定された表彰物件は、昨年と同数の4件であるが、工場から博物館・飲食施設に用途変更された「サッポロビール博物館」、ホテルから教育施設に用途変更された「武庫川女子大学 甲子園会館」が含まれているように、ベストリフォーム部門とロングライフ部門の境界が必ずしも明確ではなくっており、両者を厳密に区別することなく、両者合わせて10件を選ぶという選考方法が妥当なものとなっていると感じさせられた。今回は、ロングライフ部門の表彰物件である4件すべての現地審査に立ち合わせていただいたが、所有者、設計者、施工者および維持・管理に携わる方々が、各々の立場から真剣に建物を長く使うために努力されていること、また、所有者の方が、建物に強い愛着を持ち続けていることを知ることができ、選考委員の1人として感謝したい。

「サッポロビール博物館」(1890年竣工、1987年および2006年改修)は、旧北海道庁舎と同時期に、ドイツ・サンガーハウゼン社の設計によって精糖工場として創建され、その後、1903年に麦酒工場、1966年にサッポロビール園へと転用を繰り返し、1982年にサッポロビール博物館として再出発するに至った建物であり、北海道開拓の歴史を刻むレンガ造の産業遺産として札幌苗穂地区の工場・記念館群の一つに数えられている。1986～1987年にはスペースの拡張、劣化部分の修繕を目的に大規模な改修工事を行い、既存レンガ壁、連続レンガヴォールト天井を残すことに配慮した巧みな耐火耐震補強を行い、シンボルとしての煙突もピンニングによって補強し、空気調和設備も整備している。さらに、2004年～2006年の改修では、敷地内工場群の郊外移転と跡地開発を契機に、景観保全のための空地を確保しつつ周囲に集客施設を整備するという全体計画を立案し、本施設を中心にした豊かな緑と新たな賑わいを創出することで、まちづくりへの貢献を図るとともに、設備的にも非常用自家発電機の増設などがされており、今後も長期修繕計画に基づいて計画的な設備補修、更新が予定されている。これら、適切な改修工事を行うとともに、外構の整備、清掃にも気を配り、四季を通じた地域の魅力作りに貢献している点が高く評価された。

「天神ビル」(1960年竣工)は、福岡市中央区天神の渡辺通り、明治通り、昭和通りが交差する中心街区に建つ最新のビジネスセンターとして計画され、竣工当時に九州の高度成長のシンボリックな存在となった、述べ床面積33,000㎡超の規模を誇る建物であり、地上で地下躯体を構築しながら、同時に地上を施工するという当時の先端技術である潜函工法を採用し、18ヶ月の短工期で建設されている。茶褐色の有田焼窯変小口タイルと隅部を丸くした形状のステンレスサッシュを用い、フラットな表情にまとめた外観は、外壁面を美しく維持する「セルフクリーニング」の考え方を先取りしたデザインとも考えられ、適切なタイル保全の実施、耐久性に富むステンレスサッシュの採用と相まって、建設当時の外観を維持し、活気ある福岡のランドマークとして広く市民に根付いている。また、竣工後30年を経過した頃から開始した設備の更新はすでに一巡し、その後は5年間の中期保全計画を作成し、その計画に基づき運用管理を実施しており、省資源・省エネルギー化を適切に遂行するとともに、情報化対応、防犯性向上なども行っている。建物の維持保全、設備の更新・改修など、すべての点から、ロングライフ部門の優秀な物件と評価された。

「日光金谷ホテル」の木造一部大谷石造の本館(1893年竣工)は、数回の増改築が行われており、1935年には、地下を掘り下げて総2階を総3階に増築するという特筆すべき大改造を経て今日の姿に至っている。他に、1901年新設の木造2階建て新館、1936年の久米権九郎設計になる木造一部RC造3階建ての別館などから構成されている。建設当時の技術水準の高さと職人芸の誠実な仕事ぶり、また、使い続けることで日常的な維持管理が行き届き、保存状態が極めて良い点、新規の物を極力加えず、元の意匠を損なわない最低限の柱・壁などの構造補強と設備の更新に徹し、既存建物の制約下で最新のホテル水準までは到達できない限界を承知した上で、保存と改修のバランスを取り続け、アインシュタインが宿泊した部屋の再生など、むしろ復元的改修に重きを置いているようにも思われる点などが評価された。

「武庫川女子大学 甲子園会館」(1930年竣工)は、旧甲子園ホテルが、戦時中は海軍病院、戦後はGHQ、そして大蔵省へと管理者が転々とする数奇な歴史を辿った末、1965年に武庫川学院に取得され、建築学科の教室、スタジオ、図書室などへと全面的に改修された建物である。創建時の設計者である遠藤 新は、帝国ホテル建設に携わった経験を生かし、大谷石より耐久性に優れた日華石の選択、軒先の石材をコンクリートスラブに打ち込む一体化のディテール、スラブ上配管やトレンチによる設備の集約と更新性への配慮など、独自の長寿命化の工夫を随所に行っており、また、阪神・淡路大震災でも殆ど無傷のまま残ったことは、当時の設計・施工技術のレベルの高さを物語っているといえる。耐震改修において、元の意匠を損なわない最新の補強技術が駆使されている点、設備関連は節目ごとに改修・更新されてきたが、いずれも当初の設計意図を受け継ぎ、その風格を持続している点、さらに、旧甲子園ホテルのフランク・ロイド・ライトの意匠を思わせる全貌を完全な姿で残し、愛着をもって学生が使用している点が高く評価された。

## 第17回 BELCA賞ベストリフォーム部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 三井所 清典

第17回BELCA賞ベストリフォーム部門は、応募建築の質がさらに向上しており、関係者の努力を高く評価したい。応募に力を発揮された全ての人に心より謝意を申し上げ、建物の管理運営に一層意を注いでもらいたいと願う次第である。また、審査を重ねる中で、リフォームされる建築の従前従後の用途がさまざま、建築を壊さずに活かすことの意義をつくづく感じさせられ、皆様と共にリフォームの価値の高さをさらに広めていきたいと思うところである。

「岡山県総合福祉・ボランティア・NPO会館 きらめきプラザ」(1961年竣工、2005年改修)は、旧国立病院本館として使用されていた建物をPFIによる新しい事業手法を用いてリフォームした建物である。特徴は耐震補強としてダブルフレーム構法と称する鉄骨フレームを外周に設け、内部の既存の耐震壁を全て撤去して、所定の高い耐震性能を確保していること、また配管・配線や空調室外機、トイレなどの水廻りをダブルフレーム構造の中に収容することと合せて内部の平面的自由度を確保し、新しい建物用途に適合しやすいスケルトンを創造していることである。結果として、新しい機能は十分に満足され、建築設備は新しい用途に合わせて新設されており熱負荷の低減、自然エネルギーの活用等ライフサイクルマネージメントなど計画され、時代の要請に応える建物となっている。

「国際文化会館」(1955年竣工、2006年改修)は前川國男、吉村順三、坂倉準三の共同設計による近代建築で、全面建替が検討されていた中で、各方面からの保存要請があり、特に日本建築学会の当会館保存再生計画特別調査委員会の報告書(2004年8月提出)が契機となり、保存再生に方針が転換されたものである。特徴は敷地の高低差を利用して地下に日本庭園に続くホールを増設したこと、設備諸室を前庭の地下に増設し、既存の外観を変えずに機能を一新したことである。また、ホテル部分の中廊下を片廊下にして宿泊室を大きくしたことや、外周の木製建具を活かしてガラスを複層ガラスにするなど新しい設備と共に省エネルギー化を図って建物の性能向上を実現していることである。「保存のための再生でなく、再生のための保存」というコンセプトを見事に達成したリフォームである。

「宮城球場」(1950年竣工、2006年改修)は既存の県営球場を改修し、プロ球団のホームグラウンドにするという突然の要請に応えたリフォームである。特徴は2回のシーズンオフを利用して改修されたこと、観客が「近くで」「自由に」「贅沢」にゲームを観戦できるようさまざまな観客席の工夫がなされていること、周囲の公園を球場内に取り込み、子どもから大人まで多様な楽しみ方ができることなど、日本では初めての「ボールパーク」という概念の球場として再生されたことである。建築的には耐震性のある既存躯体にはあまり手をつけず、正面外側に増築することで短工期を可能にし、設備を含む新しい機能の要求に応え、新しい顔づくりにも成功し、「野球を楽しむ」というコンセプトの野球場を実現している。

「養命酒健康の森 記念館」(1930年竣工、2005年改修)は、かつての酒蔵を新しい工場に移築し、展示・休憩場として工場見学者に開放される記念館にリフォームされたものである。特徴は木造酒蔵の骨太の軸組には極力手を加えず、漆喰壁、なまこ壁、屋根瓦等の外装も修復して保存し、一方内部空間に設置する新たな展示装置をガラスやステンレスによる現代的な素材とデザインで構成するなど、新・旧の対比的組み合わせにある。さらに酒蔵脇に併築された休憩棟をコンクリート・鉄・ガラスによる現代建築デザインとして展示棟と対比させ、しかも照度を抑えた閉鎖的な展示棟と清澄な外部の自然に開放的な休憩棟のデザイン等重層された対比的構成である。この対比するコンセプトは設備設計にも及び、展示棟には一部床下に空調装置を仕込む以外は設備を極力軽くし、水廻りを含む設備の機能の殆どを休憩棟に集中するなど維持管理の容易さや省エネルギー設計にも反映され、全体として見事な建築としてまとまっている。

「Lattice shibaura (ラティス芝浦)」(1986年竣工、2006年改修)は7階建のオフィスビルから全60戸の賃貸住宅・SOHOへのリフォームである。近年、芝浦地域はかつての倉庫街から都心型住宅街へと変化しつつあり、このプロジェクトはその潮流を巧みに捉えたものである。特徴は運河に臨んで劇的に都心居住地域に変貌した立地と提案された都心型ライフスタイル及びその改修のデザインが見事に符合しているところである。内部は鉄筋コンクリートの既存躯体の工事の精度がよく、整然とした柱梁架構で、住宅としては階高が高くゆとりがあるため、露出配管や薄化粧の躯体を見せる室内設計もスッキリとしてよくまとまっている。外装は白と黒の塗装の塗り分けによってライフスタイルイメージをうまく表現している。また磁器タイルへの、塗装技術は今後のモデルとして耐久性を期待したい。

「龍谷大学大宮学舎 大宮図書館」(1936年竣工、2006年改修)は大宮探検隊収集品を収蔵する質量とも優れた大学仏教図書館の増設整備のためのリフォームである。特徴は増設を主として図書館の中庭を大きな吹抜け空間として室内化することによって実現し、京都西本願寺境内という周囲の佇まいを乱していないこと、図書館の機能を停止することなく10時間をかけてリフォームを実現したことである。中庭側の壁を厚くすることで構造的性能を向上させ、中庭部分に新設された屋根を活かして明るい天空光を採り入れ、内装の木部の色調や窓廻りの配慮されたディテール、人工照明の工夫などによって図書館全体が快適で落ち着いた雰囲気を出し出すことに成功している。